

● 高澤良一 第三句集 さざなみやつこ

● 冬

玄冬の海に百の目啼鷗

玄冬の地蛸粗塩すり込まれ

空つ風どんと吾が家を衝きにけり

何よりも冬日が馳走仏日庵

水面を押しくる風や返り花

生真面目な木と誰もいふ冬櫂

銅鐸のごとき手ざはり冬櫂

宿木を寄せぬ櫂でありにけり

ずいとなり水仙季の瑞泉寺

寒茜浴びゆく赤肉団しやくにくだんじやう上に

水仙をぎうと鳴らして活けにけり

今朝みれば柗咲いてをりにけり

柗の小出しに咲ける角の家

柗が咲いて四五日ほど経つか

柗のこゑにならざるこゑ交す

柗の人目にふれぬ零れ方ん

サイカチに鴟の贅季じき過ぎてをり

新薬の効き目追ひ追ひ枇杷の花

枇杷の花海に陰謀あるごとし

吟行のわれら老いたり枇杷の花

枯枝折り隣家葬りの仕度かな

辛うじて木五倍子と判る程の芽が

思はずの縁切寺の冬ざくら

冬ざくら花の漂着せる如く

落葉径小さき流行はやりの犬つれて

冬ざくら花は直下に零れけり

冬ざくら雨にまみる外はなく

尾長の目南天の実をズームイン

ややこしき坂の熱海の寒桜
寒ざくらばつと咲かせてこの陽気
すいと来て頬赭き鳥寒ざくら
臘梅の角ばる花の分光器
枳殻からたちのなかも臘梅明りして
祖師堂まで臘梅いろの雨の径
散る木の葉とよ十に一つは急降下
日にまどろむ幹にぶつかる落葉あり
葉柄の赤くて長き落葉得し
散るあとの手間弁へずいてふちる
掃けば飛ぶ落葉始末に悪き日や
われ勝ちに櫛落葉の駈け出せり
くんと鼻鳴らして落葉焚きぬたり
一両日中に散り尽くいてふとも
閻籠めに杜は落葉を匂はする
たんたんと昼のいてふの散るばかり
溪間の朽葉の八寒地獄かな
断乎つむりたる枯鷄頭の大頭
がむしやらかな姿とどめて枯蔓は
足音の往き来にふとる竜の玉
大往生遂げむばかりの枯公孫樹
臘梅も了りと窶れしこゑにいふ
コアラ見るコアラ色なる厚着の子
着膨れの過ぎし上着を手にだらり
日曜は読書に当ててちやんちやんこ
こんもりと妻の蒲団の山かたち
干蒲団日和と妻に謂はれをり
手袋の布地薄れし処かな
不整脈薬で押へ枯るゝ中
木葉髪拾ひ外来患者のわれ

心電図師走の波形出でをらむ

B棟の患者見下ろす一冬木

蠅が脚長く使へり花八っ手

籠りきり日向ぼっここのやうな日々

日向ぼこ鳥の死に処に思ひ馳せ

床起って暖房入れにゆきにけり

電気すとうぶせつせと部屋を暖めをり

鳥のごと眼つむり風邪の床に臥す

片付けてをると風邪ごゑ返しけり

炬燵して絵本の蟻の穴倉図

炬燵火に脛を焙りて「安愚楽鍋」

高橋阿伝たかはしおでんやしやものがたり夜刃 譚 震る夜に

熱爛党麦酒党相半ばして

二本目の熱爛持ちてさあさあと

熱爛の余勢をかつて人物評

熱爛に林火一辺倒の人

従つて云ひたきは何爛熱し

熱爛に酔うて全く何をいふ

蕎麦湯のみたうたう降り出しきやがったか

冬灯蟹の甲羅はキチン質

葛湯とく呪文唱ふるこちして

海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は

たらば蟹ずばと包丁入れにけり

こうばく蟹波くが陸削る夜なりけり

胸中に枯葉降らせる高英男

中ちゆうがる古の斧を振りあげ蠮螋は

詩は言語道断冬の虹立つも

浮寝にはすこし間のある日向鳥

古女こまめ噛めば齒ぐきに当りちらしけり

寒雀隣る立木へ四散して

鳩に跳んでみせたる沼の稚魚
水音にきよとんきよとんと鳩
鳩を見に常連さんの身拵へ
手前より杭・葎・鴨の睡る水
鴨の水脈家鴨の水脈を打ち消して
迂る鴨うづくまる鴨雪降り
冬鷗キツと長谷川一夫の眼
オオミノガの巢をこじあけてみるつもり
つられ立つふくら雀の一羽かな
ひいふつと枝を離るる寒雀
寒波来桜は樹皮につつまれて
前以て寒さ強調しておきぬ
風募るうへに寒さも見合はせり
冬帝の欠伸催しさうな日々
冬將軍声を囁らして何を下知
落葉風かさと賓度羅跋羅惰闇に
冬暖の家鴨日和となりにけり
鷗の目ついと流れて安房小春
ざうざうと暖房音も心音も
啖呵切るごとく大空霜晴れて
ユリの木のまばらなる葉を北風鳴らす
天を衝く俳諧弔花間石に
青畝迎へ俳人協会黄泉路支部
手強さと手強さ違ふ鉄齋忌
冬草のあをさ裏返してみても
極月の蛇屋の壇の蛇覗く
ギフトカードにポインセチアのカットかな
並びあるポインセチアと消火器と
屋上に御用納めの日の鴉
忘年の駅乗り過ぎす為ていたらく体

がさ市の山と荷積まれ立て掛けられ
年の市海山の幸積み上げて
本に本寄りかかりをり年の内
煤払ひどうにもならぬ本そのまま
本の塵本に舞ひ降る煤払
こりこりと何を剥きゐる小晦日
鉢物に土を足しやる小晦日
日の在る内購ひおかむ注連飾
飾売だいたい値をいいかげん
鮮やかな正月物に目を止めて
豆も煮て慈姑も湯搔き了へてさて
数へ日のスイツチひねればチャプリン出で
黄金狂時代抜け出し師走妻
年を越す鉢の金魚に被せ物
薄ら日のやうな一ト年振返る
鳥の名を二三覚えし年逝ける
行年のアチャコ笑うてみせ呉れても
年の瀬に打ち上げられてゐるごとし
歳旦吟二三打出の小槌より
歳旦吟何処となく腹座らざり
舌鼓はらわた鼓打ち年酒
数の子を一ト度噛めば一ト昔
餅腹に昼過ぎの空展けたる
鳥の名を少し覚ゆる年とせむ
半月に元日の町更けにけり
ピーナツつるりとむける二日かな
別嬪な鳥が来てゐる二日の木
春著の子まるぼちやの手を膝の上に
屯せる春著に聳ゆ二万噸
初泣のわつと車中を通りけり

日当りに南天の実の笑初
赤べこをくるみ上手や春著の子
初寅へ車村道飛ばし来ぬ
櫛にも器量のありて初社
初東風に浦波ザザと篠ザザと
本紅ほんもみの色に羽子つき了へし空
末つ子の受験に励む太郎月
ぶすぶすりとんどに火の手あがりけり
とんど火のあやふく立つてをりにけり
たうたうと冬草色して川ながれ
砕かれし氷氷の端に乗れり
滝桜見るに枯木に手をつきて
枯桜突つかへ棒が利いてをり
デコ木型黒びかりして凍てにけり
日陰りて張子天狗の凍みつ鼻
寝台車着きぬ今年の灯をともし
初日乗せベコ千両の振分け荷
初荷積む土間凸凹のデコ屋敷
冬日差烏山椒の枝を研げる
一渉り池のほとりの枯木見て
青天に米点打ちて公孫樹枯る
枝ぶりのどうしてかうなる枯いてふ
頭上なる枯木の何かこそつける
サンザシに巢と見えしもの枯枝なる
枯櫛日和小枝の山繭に
シヤガールの月にビュッフエの一枯木
枯幹に抱きつきざまに鶉止まる
とつつきの寒紅梅に足止めぬ
手焙そぼだに五指峙そぼだてて牡丹見る
シクラメン手のほどこしやうもなく萎れ

伊予柑を横目八朔買ひにけり
島の地理頭に入れをれば笹鳴けり
笹鳴いて洗濯物の脇抜けぬ
動物園ユーラシア区の落葉季
冷え性の本土キツネとおもひけり
何とこの日本あなぐま 獯 目まぐるし
後生楽な縞ふくろふの貌のぞく
みみづくの雨は苦手と見ゆ素振り
ふくろふの目蓋まなぶた開けて吾を見る
ふくろふの振るつたことをいふごとし
朝からの雀のこゑや松とれて
大楠の根方に隆と焚火跡
もういちまい余分にはおり探梅行
おしくらまんぢゆう服台無しにしてをりぬ
咳こだまりヨウメンシダの林にて
青天に月は大きな氷玉
さえざえと紙切り裂ける肥後之守
ミシシッピ―鰐の横縞雨に冴ゆ
白妙の富嶽相模の風表
二階より顔を突き出し雪といふ
稀の雪矢鱈せはしくなりにけり
新あらの雪踏み来て宋代禅講座
葉に雪の付ける頃合ありにけり
雪つもる時間たつぷりありにけり
平橋に続き反橋雪積める
何と雪ワライカワセミ洩い貌